

清の繁栄 —『万寿盛典』初集からみる多民族国家の姿—

17世紀、ユーラシア東方に広大な領域・多民族を支配する清が成立します。その清の繁栄の様子がわかる資料『万寿盛典』初集を見ていきます。また、『万寿盛典』初集が含まれていた「濱口梧陵文庫」(和歌山県立図書館所蔵)から、江戸時代の和歌山と日本の社会の特徴についても見ていきます。

1 資料

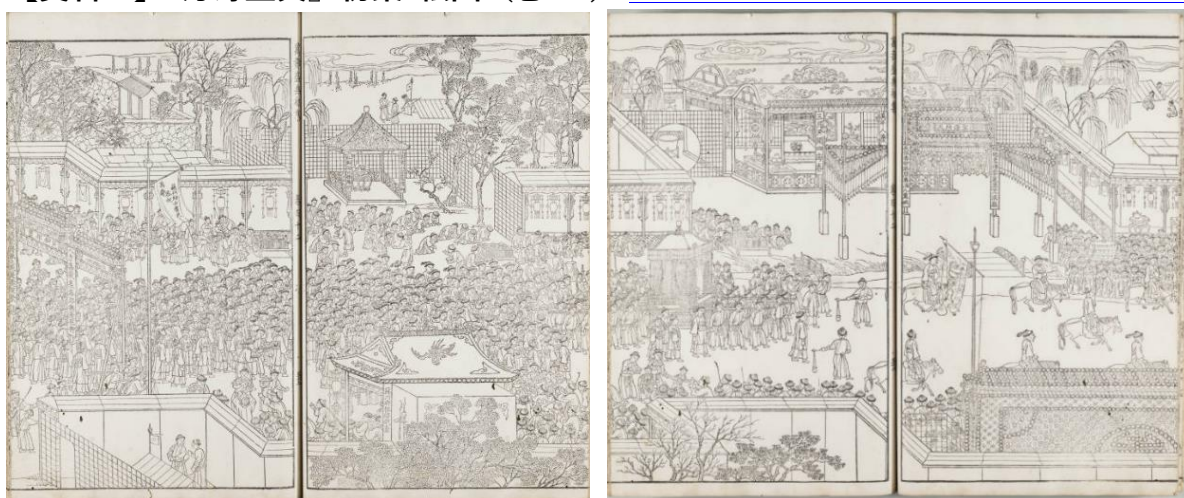
【資料1】『万寿盛典』初集 絵図(巻41)

[*資料全体のデジタル画像\(和歌山県立図書館のページが開きます。\)](#)



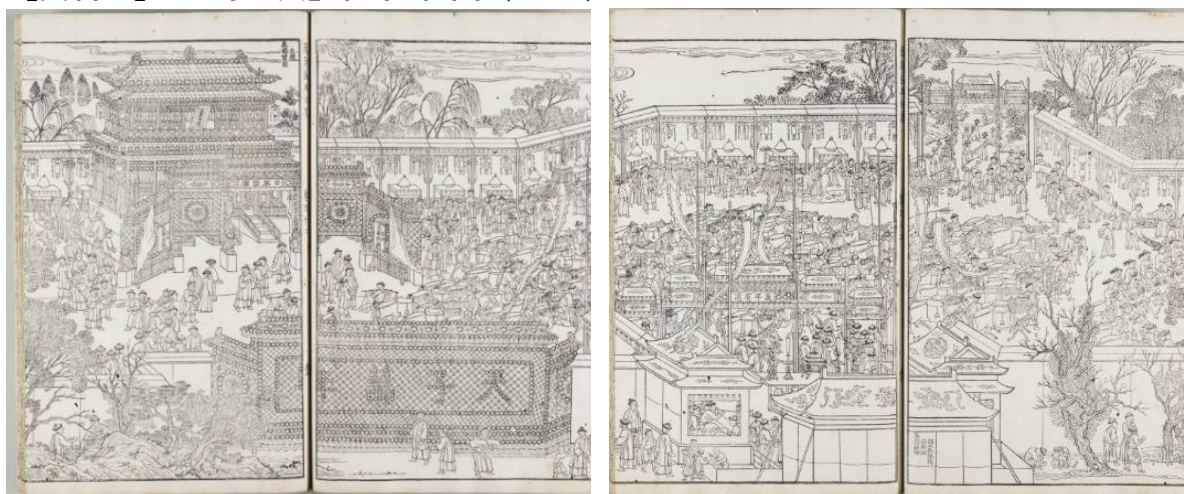
【資料2】『万寿盛典』初集 絵図(巻42)

[*資料全体のデジタル画像\(和歌山県立図書館のページが開きます。\)](#)



【資料3】『万寿盛典』初集 絵図(巻42)

[*資料全体のデジタル画像\(和歌山県立図書館のページが開きます。\)](#)



(1) 清の繁栄

17世紀前半、中国東北部で成立した清は、勢力を拡大してユーラシア東方の広大な領域を支配しました。満洲^{まんしゅう}人である清の皇帝は、満洲人の君主であると同時に、モンゴル人に対しては大ハーン、漢人や周辺の朝貢国^{ちやうこく}に対しては儒教を重んじる中華王朝の皇帝としてふるまいました。また、内陸部ではチベット仏教の保護者としてふるまい、自らが主導権を握りつつ、多様な人々の支配者として君臨しました。1661年に即位し55年間在位した康熙帝^{こうき}の時代に、清は最盛期を迎えました。

この時期に、漢人の人口は急激に増加し、居住圏が拡大しました。漢人社会は清の内外を問わず移住や転業が容易に行われていました。その結果、東南アジア各地で華僑^{かきやう}社会が形成され、ヨーロッパ人の進出とも相まって、広大な海上交易ネットワークが生まれました。一方、清の領域内に住む人々の間に一つの国の民という集団意識は高まりませんでした。

(2) 本資料について

①『万寿盛典』初集

本資料は、1713年の康熙帝の60歳の誕生日に開催された祝典の様子が記された全120巻の書籍です。そのうち41巻と42巻の絵図は、清の著名な画家や名工によって製作され、当時の北京^{ペキン}の民俗や建築などがわかる重要な資料です。

資料1では、複数の象^{ぞう}が並んだ様子が描かれています。この象は、朝貢国であるベトナムから献上されたものです。ここから、清と東南アジアの交流が盛んであることがわかります。

資料2では、康熙帝が乗る大輿^{たいよ}の行列が描かれています。行列の周囲の人々には、皇帝から与えられた菓子が配られています。

資料3では、「天子萬年^{てんし まんねん}（天子万年）」と記された壁が描かれています。天子とは、中国の政治思想において天から天下の統治を委ねられた存在のことです。ここでは、天子とされた康熙帝の支配が未永く続くことを祈って記されています。

②「濱口梧陵文庫」

本資料は、濱口梧陵²の子孫から和歌山県立図書館に寄贈された「濱口梧陵文庫」に含まれる資料の一つです。これらの大部分は、梧陵自身が所有したものと考えられ、中国から輸入された漢籍^{かんせき}が多いことが特徴です。

梧陵が書籍を収集した江戸時代後期は、幕藩体制の動揺から政治や社会を批判的に見て、古い体制を変革する方法を模索する動きが学問の分野で盛んになります。また、庶民の間でも読み・書き・そろばんをはじめとする教育が盛んになり、日本では同時代の他地域と比べて高い識字率になっていました。そのような時代背景のなか、梧陵は特に地理や歴史関連の漢籍を多く収集していました。

また、農村ではそれまでの自給自足的な社会のあり方が変化し、商品経済が農村にも及ぶようになり、各地でさまざまな特産品がつくられました。梧陵は、ヤマサ醤油^{しょうゆ}の当主として広村^{ひろむら}（現在の和歌山県広川町^{ひろがわ}）と銚子^{ちようし}（現在の千葉県銚子市）を行き来し、特産品である醤油の商人として活躍しました。このように海外との貿易が制限されながらも、日本列島内では物資と人の交流が盛んであることが、江戸時代の日本の大きな特徴です。これにより日本各地の文化が相互に共有され、日本に住む人々の間に文化的に同質であるという集団意識が高まりました。

1 朝貢とは、中華王朝に対して周辺国が定期的に使節を派遣し、貢ぎ物を献上すること。朝貢をする国の多くは、中華王朝の曆^{こよみ}を使用し、皇帝から官職を授けられる冊封^{さくほう}を受けて、中華王朝から経済的・軍事的な恩恵を受けていました。

2 濱口梧陵（1820～1885）は、現在の和歌山県広川町出身、ヤマサ醤油7代目当主で、「稲むらの火」の逸話^{いつわ}で知られる人物です。耐久社^{たいきゅうしゃ}（現在の県立耐久高等学校、広川町立耐久中学校）を創設、初代和歌山県会議長を務めるなど、幕末から明治時代初期にかけて幅広い分野で活躍した人物です。

3 活用のポイント

- **歴史総合の場合…B 近代化と私たち**

B(2)結び付く世界と日本の開国の授業の際に、多様な人々が存在する清の繁栄の様子を読み取る資料として活用することができます。また、解説シートを用いて「清代の中国と江戸時代の日本の社会の様子には、どのような違いがあるのだろうか？」と問いかけることによって、2つの社会の違いに気づき、のちの欧米の進出による近代化の動きに対する中国と日本の対応の違いを考察する際の根拠にすることができます。

- **日本史探究の場合…C 近世の日本と世界**

C(3)近世の国家・社会の展望と画期(歴史の解釈、説明、論述)の授業の際に、「なぜ『万寿盛典』初集が江戸時代の和歌山にあったのだろうか？」と問いかけ、濱口梧陵が地理や歴史関連の漢籍を収集していたことに気付かせて、身近な地域の事例から近世の社会の特徴を探究するきっかけにできます。また、上記の問いから梧陵の学問に対する姿勢や商人としての活動を探究することで、近世の学問の発達や商業の発展を学び、近世がどのような時代であったかを身近な地域の事例から知ることができます。

- **世界史探究の場合…C 諸地域の交流・再編**

C(3)アジア諸地域とヨーロッパの再編の授業の際に、「資料には、何が描かれているだろうか？」と問いかけることで、当時の人々の服装や髪型や象、大輿、「天子万年」の文字などに気づき、清の社会について学ぶことができます。

また、「清の統治にはどのような特徴があるだろうか。」「なぜ清は広大な領域を支配したのにも関わらず、多様な宗教や民族が共存できたのだろうか。」などと問いかけ、祝典を行い民衆の崇敬を集めようとしていたことや、解説シートから君主として各地の文化を尊重しつつ多民族を統治していたことを読み取る活動として活用することができます。

4 出典

- ・【資料1】【資料2】【資料3】和歌山県立図書館所蔵 「濱口梧陵文庫」
請求記号 梧陵///58-2 資料コード 326582988 『萬壽盛典初集 絵図』
※文書群の詳細については、[和歌山県立図書館「濱口梧陵文庫」デジタルアーカイブ](#)をご覧ください。一部改変して掲載しています。

5 関連資料・ウェブサイト等

- ・パネル展示「濱口梧陵生誕 200 年記念 県立図書館・文書館合同展示 濱口梧陵文庫」([和歌山県立文書館](#))
- ・「濱口梧陵文庫の世界」([和歌山県立図書館](#))
- ・「和歌山の自由民権運動一木国同友会と濱口梧陵」([和歌山県立文書館](#))
- ・「万寿盛典」([国立公文書館デジタルアーカイブ](#)) ・「『万寿盛典初集』」([故宮博物院](#))

6 参考文献

- ・和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近世』和歌山県、1990 年
- ・茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』山川出版社、1997 年
- ・松本泰明「近世・近代移行期の大蔵書 和歌山県立図書館所蔵「濱口梧陵文庫」」([『和歌山県立文書館紀要第 23 号』和歌山県立文書館、2021 年](#))